特集

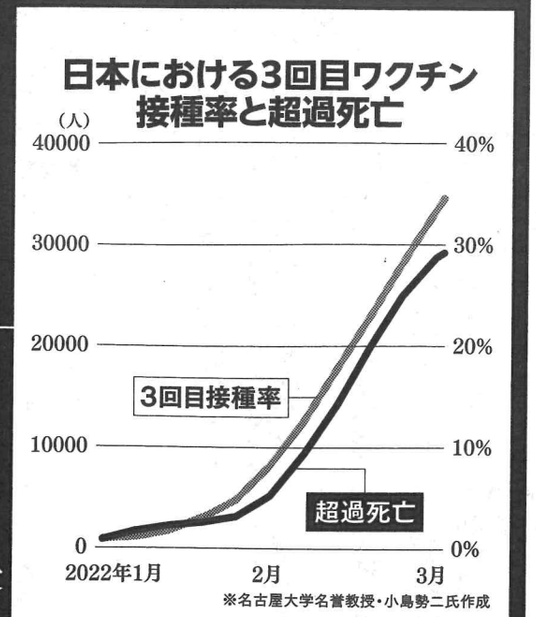
米一流紙も報道「コロナワクチン」の暗部

▶自分をただの「運び屋」と言い出した「河野太郎」の逃げ口上

▶無責任発言に遺族が怒り「家族の死はデマではない」

▶米紙が紹介「ワクチン接種者の方が感染しやすい」調査の内容

▶「すでに〝大薬害〟になっている」という専門家の警鐘



〈「運び屋」の私が「後遺症について」責任をとるなどという発言をしたことはありません〉

元ワクチン接種推進担当大臣で、現在はデジタル大臣を務める河野太郎氏が自らのブログにそう綴ったのは昨年の大晦日だった。

〈最近、私に関して、あまりに悪質なデマをしつこく流されるようになってきました。これからも悪質なものについては法的手段に訴えることを検討していきますが、そうしたデマのいくつかについてここで説明します〉

とした上で、

〈「『ワクチンの後遺症について責任を持つ』と言ったのだから責任を取れ」〉

というネット上の声は〝デマ〟に他ならない、と主張したのだ。曰く、

〈厚労省から接種の進め方についてクレームが入るようなことがあれば、私が責任を持ちますから遠慮なく、進めて下さいと伝えました〉

自身が「責任を持つ」と言ったのは「接種の進め方」についてであり、ワクチンの後遺症に関してではない。そう訴えた上で、冒頭のように自らを「運び屋」と称したわけだ。

〈反ワクチングループが、私があたかも後遺症について責任をとるなどと発言したかのようなデマをしつこく流しています〉

どうやら河野氏、「後遺症について責任をとる」と発言したと言われることがよほど嫌なようである。しかし、氏は大臣としてワクチン接種を推進した張本人。「運び屋」などという言い訳が通用するはずはない。

河野氏のブログの内容が報じられるや、ネット上に「無責任」「逃げようとしている」といった声が溢れたのは当然の成り行きだった。「大炎上」に焦ったのか、年明けの6日に更新したブログでは、

〈ご家族を失ったご遺族の悲しみはいかばかりか〉

と、ワクチン接種後に家族を亡くした遺族の心情に触れてみせたものの、〝取って付けた感〟は否めない。

それにしてもなぜ河野氏はこのタイミングで自分が果たした役割が「運び屋」だと強調することにしたのだろうか。「運び屋」とは、武器や麻薬など、主に〝良からぬ物〟をある地点から別の地点まで運ぶ人間を意味する言葉である。

本誌はこれまで3回にわたってコロナワクチンの〝良からぬ面〟に光を当ててきた。例えば、医療機関やワクチン製造販売業者から国に報告された、国内でのワクチン接種後の死亡例は2022年11月13日まで1919件。ただし、厚労省がワクチン接種と死亡の因果関係を認めた例は1件もなく、ほとんどのケースが「γ（ガンマ）（評価不能）」とされている。

また、「例年より増えた死亡者数」を表す超過死亡についても繰り返しお伝えしてきた。上のグラフで分かる通り、昨年初め頃から、

〝潮目〟は変わり始めているのかもしれない。何しろ、コロナワクチン接種推進の責任者だった張本人が逃げを打ち始めたのだから――。自らを「運び屋」と称する責任逃れの弁明が炎上している河野太郎デジタル大臣。そんな中、米一流紙も「ワクチンの暗部」を報じた。

超過死亡がワクチンの3回目接種率と同じペースで増え続けている。しかもこれは我が国特有の事態ではなく、追加接種を進める多くの国や地域が同じ事態に直面している。

こうしたワクチンの「不都合なデータ」が次々と明らかになる中で飛び出した、河野氏の「運び屋」発言。多くの人がそこに〝逃げ〟の姿勢を見出したのも無理からぬことだろう。

「河野大臣のブログを読んで思ったのは、〝向こうもすごく必死なんだな〟ということです。週刊新潮が記事にしたり、コロナワクチン被害の勉強会の動画が出回ったことで、必死になって反応せざるを得なくなったのだと思います」

そう話すのは、コロナワクチン接種後に妻が亡くなった小金井隆行さん。

「因果関係が認められていようがいまいが、亡くなっている人が現にいるのに、〝私はただの運び屋だったので……〟と当時の最高責任者がブログで表明するということがどれだけ無責任か。ふざけんなって話じゃないですか。あれだけワクチンの接種を推奨していたのに、ワクチンの危険性が指摘され始めると、即座に反論してブロック。責任逃れにしか見えません」

「一言でも声を…」

小金井さんには他にも気になる点があるという。

「あのブログは、私たちのような遺族が存在することと、デマを流す人間がいることを同列に語っているように思います。でも、私たちは事実しか伝えていません。私の妻が亡くなったのは本当です。それはデマでもフェイクニュースでもないのです」

小金井さんの妻は21年9月6日に1回目、9月27日に2回目のワクチンを接種。亡くなったのはその12日後の10月9日だった。

「妻は1型糖尿病の持病があったので、ワクチンを打つことにためらいもあったのですが、それよりもコロナにかかって重症化することへの不安が大きかったのでワクチンを打つことにしました。政府やメディアが、持病、基礎疾患を持っている人は特にワクチンを打ったほうがいい、と喧伝していたことも当然ながら影響しました」

そう振り返る小金井さんの妻は54歳。エアロビクスのインストラクターをしており、日常生活では人一倍健康に気をつけていたという。家族は夫婦とペットの犬2匹。

「9月27日に2回目を打ってからの異変に僕は気づけず、死んでしまった後に妻のフェイスブックを見て、微熱が出ていたことを知りました。今思うと、前日、早い時間からリビングで横になっていた。あれが前兆だったのかもしれません。ちょっと一言でも声をかけてあげれば良かったと思いますし、本当に申し訳なかったなと思います」

小金井さんが言葉を絞り出す。

「妻が亡くなる前はちょう

どワンコ2匹のうちの1匹の体調が悪くて、毎日妻が病院に連れて行っていたのですが、10月9日も朝から妻が連れて行く予定だったのです。それで前日は、調子の悪いワンコに付き添って妻は1階のリビングで寝て、僕は2階で寝ていました。それで朝、リビングにおりてきたらもう亡くなっている状態でした」

死因は虚血性心疾患。亡くなる直前まで妻が自分で毎日記録していた糖尿病の数値に異常はなかった。

「そうなると、僕としてはやっぱり妻の死因はワクチンしか考えられないんですよね。検死した先生の話だと、死亡推定時刻は夜中3時くらいだそうです。ワクチンによってできた血栓が原因で死んだのではないか、と思ってしまいます」

23頁の表をご覧いただきたい。これはワクチン接種後、死亡するまでの経過日数をグラフ化したものである。ワクチン接種の翌日に死亡するケースが最も多く、その後、日が経つにつれて少なくなっていることが分かる。死因の半数近くを占めるのは、血管系障害と心臓障害である。

この表を作成したのは、京都大学名誉教授の福島雅典氏。京大附属病院外来化学療法部長などを歴任した福島氏が言う。

「こういった厚労省のデータがあるのに厚労省が『評価不能』と断定するのは、無責任、非人道的です。これらのデータを見れば、臨床医はワクチンと死亡の関係を疑います。何よりも、解剖を行った法医学教授がワクチン関連死と報告しているのに、評価不能と言うのでは、もはや科学・医学を否定しているとしか言えません」

臨床的な事実と符合

ちなみに、先の小金井さんの話に出てきた、ワクチン被害の勉強会の動画。その中で厚労省の役人たちを糾弾しているのは、他ならぬ福島氏だ。昨年大晦日に自らのブログに逃げ口上を綴った河野氏は、新年早々、福島氏が映った動画の「切り抜き」を紹介しているツイートに反応し、

〈反ワクのデマゴーグがまずやるべきことは、そういう（ワクチンに関する）論文をきちんと揃えて議論すること〉

と書いた。

河野大臣の投稿を見た福島氏は、

「何故、河野大臣はワクチン接種によって亡くなった方々のご遺族の悲痛な声に耳を傾けようとされないのでしょうか？　ワクチン接種によって多くの方が亡くなっている事実、非常に多くの人たちが長引く副反応で今現在苦しんでいる事実を直視すべきです。そもそも私が、厚労省の発表しているデータと一流科学誌に発表された論文をベースにしか話をしていないことも理解できないようですね」

と、こう語る。

「私は単に科学的な事実を申し上げているだけです。既に多くの論文でワクチンのデメリットが明らかにされている。厚労省の発表するデータでもそれが明白です。それに眼を瞑って、まるでコロナワクチンはいいことずくめで、重大な副反応などはないかのように接種を進めていることが問題だと私は言っているのです。副作用のない薬などはない。医者でもない者にワクチンの評価ができるわけがないでしょう」

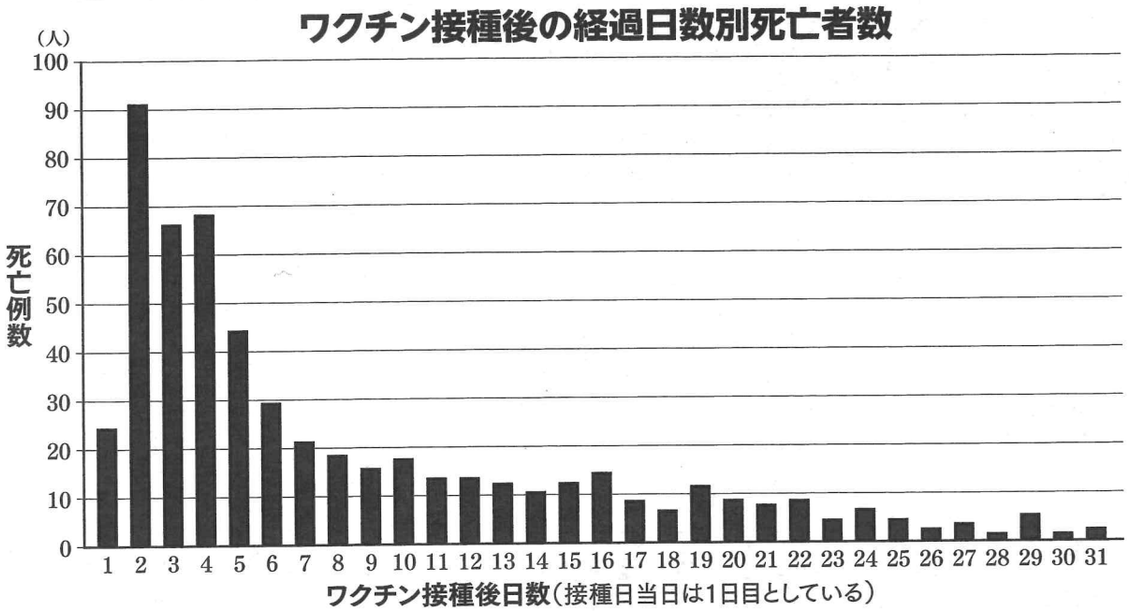
福島氏は、常に厚労省の発表するデータと論文を元に話をする。例えば、昨年8月22日から28日のワクチン接種歴別の新規陽性者数を比較。多くの年代で未接種者より2回目、3回目接種者の方が10万人あたりの新規陽性者数が多くなっていることを指摘した。

「これだけ皆がワクチンを打っているのになぜ感染者数が増え続けているのか？　ワクチン接種によってむしろ感染しやすくなり、ワクチンを接種した人同士で感染し合っている構図になっているのです。そもそも次々と変異するウイルスにワクチンで対応しようという考え方自体が論理的に破綻しています」

ワクチンには感染予防効果がないどころか、接種を繰り返すとより感染しやすくなるのではないか、と問う報道も出始めた。

1月1日、そうした内容の記事を掲載したのは米国の一流紙「ウォール・ストリート・ジャーナル」。そこでは、北米などで流行しているオミクロン株亜種「XBB」は、ワクチンを繰り返し接種した人のほうがかかりやすくなることを指摘。さらに、医療従事者を追跡した研究では、ワクチン接種を3回以上受けた人は、未接種の人の3・4倍、2回接種した人は2・6倍、コロナへの感染率が高くなった、とのデータも紹介した。これらは査読前の論文を元にしているため、確定的な情報とは言えないが、

「このウォール・ストリート・ジャーナルの記事は『Nature』や『Cell』など一流科学誌に掲載された論文を元に書かれており、今、眼にしている



※厚生労働省の集計から京都大学名誉教授・福島雅典氏が作成

臨床的な事実と符合しています」（同）

こうした記事や論文を〝きちんと揃えて議論〟するべきなのは誰なのか。指摘するまでもなかろう。

「河野大臣のワクチンに関する発言は、ワクチン接種を推進する医師や研究者の意見を元にしているものと思われます。政治家が、『Nature』や『NEJM』などの海外論文を自分で読んで理解できるとは思えません」

長年小児がんの研究、治療に携わってきた名古屋大学名誉教授の小島勢二氏はそう話す。

「ぜひワクチンに関して問題になっている点について、河野大臣が情報を得ている医師や研究者と、ワクチン接種に慎重な医師や研究者との間での討論を実現してほしい。その模様をユーチューブなどで公開し、国民の判断をあおぐことが、今の混乱を解決するのに有効な方法だと思います」

高知大学医学部皮膚科学講座名誉・特任教授の佐野栄紀氏は、

「河野氏の言説は責任回避に終始して取り乱しており、非常に残念」

とした上で、氏の役割は、「ワクチンは安心・安全」という政府メッセージの「運び屋」だったと指摘する。

「河野氏や大手メディアなどの〝情報運び屋〟の活躍もあり、8割を超える国民が2回接種を行いました。あの当時は、ワクチンの2回接種で集団免疫が得られ、コロナの危険はなくなって日常に戻れる、と喧伝されていました」

実際にどうなったのかはご存じの通りで、

「2回接種では不十分、免疫が減衰するため3回、4回と数カ月ごとに打つべし、とおよそ従前のワクチンではあり得ないような方針転換がありました」

と、佐野氏は語る。

「また、その間、多くの副反応も明らかになり、家族の死亡や、重症後遺症に苦しむ人が増えました。そうした事実に、最近になってようやく国民の多くが気づこうとしています。河野氏だけではなく、ノーベル賞受賞者まで広告塔となり、〝安心・安全情報の運び屋〟として機能していたことは忘れてはなりません」

さらに、

「空気に巻き込まれやすい日本人の宿痾を考えたとき、河野氏に石を投げることができる人がいるでしょうか。最も大切なことは、今後起こるであろう健康被害を最小化することです」

福島氏はこう語る。

「本来ワクチン接種はメリットとデメリットの両方を提示して、個人の判断には立ち入らずに行われるべきです。ところが今回のコロナワクチンは、必要がないような人にも大規模に接種を勧めて人為的に被害が拡大しました。すでに『大薬害』になっている、と知るべきです」

にもかかわらず、政府は相変わらず小児や乳幼児にまで接種を推奨し、大手メディアや多くの医療関係者も追従している。まずは〝知る〟ことが重要だ。いかに異様な事態が進行しているのかを――。